2023年2月12日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

灯し火のある世界

［ルカによる福音書8章16～18節］

「ともし火をともして、それを器で覆い隠したり、寝台の下に置いたりする人はいない。入って来る人に光が見えるように、燭台の上に置く。隠れているもので、あらわにならないものはなく、秘められたもので、人に知られず、公にならないものはない。だから、どう聞くべきかに注意しなさい。持っている人は更に与えられ、持っていない人は持っていると思うものまでも取り上げられる。」

［1］　イエス様の「たとえ」とは

今日の聖書の箇所は「ともし火のたとえ」と言われる主イエス・キリストの言葉です。たとえ話の特徴は、「答え」が押し付けられているのではなく、私たちに「問い」が投げかけられているということですね。ですからその聴き方は様々であって良いのだと思います。

ただ、言えることは、イエス様のたとえ話は、そのどれもが「神の国の支配」というものとの関わりで語られていると思います。それは、主イエス・キリストがまことの王として治めておられる国、ということで、それが彼岸であるあの世の国であるということもありますが、また二千年前、イエス様がおいでになったその時から、私たちの暮らしやこの世界の中に、この神様の国のご支配はもう始まっているのですよ、ということを告げているということも言えると思います。

［2］　「ともし火」とは

イエス様は、今日の「ともし火のたとえ」を「種まきのたとえ」に続けてお話されました。「種」「種つぶ」というのは、そこに「いのち」があり、私たちの知らないところで成長し、それが地上に現れるという「神秘」がそこにあります。これは「神様の言葉」とか「福音」というものの本質だと思います。そして、今日の「ともし火」というのは、ある意味、種とは対照的です。下に隠れてはいません。今度は上の方、周りを照らす「光」となるのです。これもまた福音の本質です。神様は「光」であって、この世界は、まるで闇が支配しているように見えますが、実は神様の「光」が照らされているのだ、と言って良いと思います。これは、キリストの到来と共にハッキリと現実になったのです。神様は、この世界を、私たちを、捨ててはいません、諦めてはいません。一番初めに神様がこの世界に対してされたことは何だったでしょうか？―「光、あれ！」です。闇と混沌（カオス）が覆っていた世界に、光がやってきた。そしてその光の中で、すべての生物も、人間も造られたのです。それが「神のご支配」の最初です。そして、それから今から二千年前に神の独り子が誕生しました。このお方は、人間のために苦しみ抜かれ、十字架で死なれましたけれども、私たちにその御業と言葉で「神様の愛とはこういうものなのだよ」というものを残して下さいました。それについては色々と言えると思いますけれども、私が今一番感じるのは、イエス様の「祈り」だと思っています。神ご自身に等しいお方が、私たちのために祈って下さっている、ということです。

思い出して頂きたいと思うのは、十字架にお架かりになられる直前、ご自分の許から弟子たちも逃げて行ってしまうことを知っておられた主は、ペトロに対してこのように言われました。「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った」（ルカ22:32）。あなたはこれから弱さを露呈することがある、自分で自分が情けなくなるなるようなことがある、自分の信仰がガラガラと崩れるような思いになることもあるだろう、しかしそれはあなたを誘惑するサタンの仕業なのだ。でも大丈夫！このわたしはあなたの信仰が無くならないように祈っているよ、と、神の子が仰っているのです！―わたしはこれこそが、闇の中に輝く光だと思いました。そしてこれは「灯し火」です。イルミネーションでもネオンサインでもありません。当時は小さなランプライトです。ろうそくの炎のようなものです。強い光ではなく、私たちに寄り添う、温かく優しい光です。

私は、最近自分の中に、割と人を裁く傾向というのがあることに気付かされ、時々ドキッとさせられています。自分はどちらかというと優しい人間かと思っていたところがありましたが、それこそ「白く塗った墓」のように、内側はとても人に見せられないもので一杯なのです。そして人を裁く。しかし、そのような高慢な思いというものは、結局自分を苦しめますね。平安がなくなるのです。特に忙しくなるといけませんね。しかし、そういう時にこそ、イエス様がこんな自己中心な者のためにも祈っていて下さっている、ということに気付かされ、闇が心を覆いそうになる時は、瞬間でも「イエス様、ごめんなさい。助けて下さい！」と祈ればよいのだと思って、そのようにしています。私は本当に弱い人間なのです。でも知って下さい。私がこのようなことをお話しているということ、それは、神様の灯し火があるから、証しが出来るのです！この灯し火は、主のみ言葉でもあり、また聖霊であると思います。（聖霊降臨の時、舌のような炎が弟子たちに降った、という記事もありますよね）。

そして、この灯し火はまた、私たち自身の「祈り」だとも言っても良いと思うのです。イエス・キリストの祈りを受けて、私たちも「祈る者」に変えて頂いているのです。太田教会の牧師の林健一先生の話ですが、先生は20才の時、旧統一協会に入っていたのですが、そこを抜けるきっかけになったのは、電車の中で偶然再会したクリスチャンの方（女性）が、自分が今統一協会に関わってるということを話しをしたところ、その方は、「そうなの、そうなの」と、それを静かにずっと聞いてくれた、何一つ自分を非難しなかった、ただ少し経ってから、「私の知っている方で統一協会から抜けて今教会に来ている方がいるので一度その方のお話も聞いてみませんか」というお手紙を頂いたと言うのです。統一協会少し疑問を持ち始めた林先生はそこに行って、それが脱会にも繋がり、その教会の方々も祈って下さっていた、ということを後で知りましたとお話してくれました。そうです、この女性もその教会の方も、その存在が「灯し火」となったのです。主イエス様の招きの光を、とても自然に輝かせていたと言えるのではないでしょうか。

［3］ 私たちも「灯し火」とされて

「ともし火をともして、それを器で覆い隠したり、寝台の下に置いたりする人はいない。入って来る人に光が見えるように、燭台の上に置く。」―眩しい光ではないけれども、優しい光、誰かに寄り添う光ををあなたも輝かすことが出来る。伝道とは大伝道集会のような形だけじゃない、いやむしろ、私たちの頑張りだけで伝道してやるぞというのでも、またそういうことが出来ない自分にガッカリすることもないと言っていると思います。「隠れているもので、あらわにならないものはなく、秘められたもので、人に知られず、公にならないものはない。」―神様の力が、神様の愛が、さまざまな「灯し火」となって、この世界に広がって行くのですね。イエス様が、私たちの中で、私たちを通して働いて下さっているのです。ですから主は、挫折するペトロのこともご存じでこう仰っているのです。―「わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」と。―私たちもまた主の愛と赦しを映し出す「灯し火」なのです。そのためには、本当に主に聞き、信頼するということですよね。「だから、どう聞くべきかに注意しなさい。」（18節）と仰っている通りです。

　今日これからご一緒に歌いたいと思っている讃美歌は、「善き力にわれ囲まれ」という歌です。この中にも「主のともしび」という言葉が出てきます。これは20世紀のドイツの牧師D・ボンヘッファーの、彼が死ぬ4ヶ月前に、婚約者に宛てて獄中で書いた手紙の中にあった詩による讃美歌です。彼はナチスの蛮行を止めたいと、地下抵抗運動に加わり、捕えられ、処刑されたのです。彼の決断は、あの時代の中でギリギリの葛藤しながらの決断であったと思います。「牧師でありながら」と、非難する人もいます。しかし、この詩を読むと、彼が本当にこれからの時代を真剣に祈り、そして主のご支配を信じながらの決断であったように思えてなりません。そのボンヘッファーの詩をお読みし、祈りたいと思います。

**新しい一九四五年  
よき力に真実に、そして静かに取り囲まれ、  
不思議にも守られ慰められて、私は毎日毎日をあなた方と共に生き、  
そしてあなた方と共に新しい年へと歩んで行く  
  
過ぎ去った年は私たちの心をなおも悩まし、  
今の悪しき日々の重荷はさらに私たちにのしかかるだろう。  
ああ、主よ。この恐れ惑う魂に、あなたの備えて下さった救いを与えて下さい。  
  
あなたが苦き杯を、あの苦しみの苦き杯を、**

**なみなみとついで差し出されるなら、私たちはそれを、ためらわずに感謝して、あなたのいつくしみ深き愛の御手から受け取ろう。  
  
あなたがこの闇の中に持って来て下さったともしびを、今日こそ暖かく静かに燃やして下さい。  
御心ならば、私たちを再び共に会わせて下さい。  
私たちは知っている。あなたの光が夜の闇をつらぬいて輝くことを。  
  
善き力に不思議にも守られて  
私たちは心安らかに来るべきものを待つ。  
神は朝も夜も、また新しい日々も  
必ず確かに私たちと共にいて下さる。**

お祈り致します。

主なる神様、あなたは生きておらっれ、この世界にあなたという灯し火が確かに輝いていることを感謝致します。私たちも誰かを通し、また教会を通してイエス様の「光」の中に招かれたことを思います。今も祈っていて下さる主よ、どうか、私たちが闇の中に誘われる時に、光を持って正しい道を照らし、また、罪の中に佇んでしまう時、赦しの光の中に立ちあがることが出来るように、あなたご自身が御手を添えて下さい。そして、破れ多い私たちですが、その破れから、あなたの光と強さが輝きますように。この地域で私たちの教会も灯し火となり続けていくことが出来ますように。主イエスの御名によって祈ります。アーメン。